ＴＴＯＰで地域活性化

稲本氏、船津氏も熱く語る

片野ＪＡ函南東部組合長

活発に意見交換したパネルディスカッション

深澤　史帆氏

事例発表：深澤　史帆氏（日本豊受自然農（株）静岡県函南農場　農業従事者）「農ガール　函南農場体験記」

深澤さんは、新卒入社当初はわからないことだらけで、せっかく蒔いた種が大雨で流されてしまったり、収穫物をなかなか掘り出せなかったりと苦労の連続だったと言いつつ、3年目の今は、失敗を糧にした工夫と努力が少しずつ形になってきていると振り返っていた。

安心安全な食の提供を使命とする豊受自然農、その最大のこだわりは土づくり。植物活性液アクティブプラント、マザーチンクチャー、落ち葉堆肥、牛フン堆肥、ダム底の泥などの自然の恵みとホメオパシーの智恵を最大限に活かしてつくりあげた土壌に、自家採種した固定種・在来種を蒔いて、雨の日も風の日も日々愛情を込めて育てていく農作業の様子がＶＴＲをまじえて紹介した。

事例発表：吉田　光弘氏（日本豊受自然農　函南農場（静岡県）食品加工責任者）「自然型農業から食の改革へ」

吉田　光弘氏

「豊受自然農では、在来種、固定種にこだわり、無農薬・無化学肥料、そして、愛情豊かな優しい心で育てられた野菜やハーブ達を原材料とし、「いつでもどこでも、安全安心。そして、美味しい」レトルト食品や黒大豆味噌等、現在50品目の加工品を作っています」と紹介。

さらに「これからは日本の『食文化』の素晴らしさを取り入れた製品作りとして、発酵食品、竹粉、竹水入りの商品をさらに充実し開発していく」と語った。

来賓講演：片野　敏和氏（ＪＡ函南東部　代表理事組合長、酪農王国オラッチェ代表、有限会社片野牧場代表）「オーガニック酪農30年の挑戦と今後の展望」

片野　敏和氏

丹那牛乳の進むべき道は、地元の牛乳の良さを最大限に引き出せる、また、消費者に本物の牛乳供給できることと決断して、低温殺菌の牛乳の製造、そして、与える穀物についても、妥協をせず、遺伝子組み換えをしていないＮＯＮ－ＧＭＯの穀物に限定し、穀物に農薬を散布することが通常のところ農薬を使わない方法にて力ビも防止することにこだわった丹那牛乳がよそにないこだわりの商品となったこと、そして、6次産業化にも取り組み、酪農王国オラッチェというテーマパークを作り、この丹那牛乳から作られたチーズやバターなどの商品は他にないものであるとした。

20年前は、安心安全よりも安いものがよいという時代、苦しい経営の中、なぜ食の安心、安全にこだわっているのかをわかっていただくために苦労されたとのこと。しかし、今は理解も進む時代となり地域へ貢献もできる施設となり、オラッチェの存在価値も評価されるようになったと語った。

そして、同じ函南町にある日本豊受自然農の由井大会長との出会いについて語り、由井大会長のその思いの強さ、考え方に引き込まれ何とか由井大会長の思いを形にしていかなければという気持ちになったと話した。

また、片野組合長は、今のＴＰＰの問題など国政の状況では、本当に日本の農業が守れるのか、安心安全な農産物が守れるのか大きな疑問を投げかけたいと訴えた。

「何にも変えられない安心、安全へのこだわり、安心できる食材を食べていただきたいという思い、これは、豊受自然農の由井大会長と同じです」と語りながら「安心安全にこだわった食材はコストがかかる、手間がかかること、これは健康と引き換えであることをよくよく理解していただきたい」とも語った。

最後に、豊受自然農とＪＡ函南東部、丹奈牛乳、酪農国オラッチェとのパートナーシップを今後もつなげていくことを願って、「ＴＴＯＰ」と命名され、地域を活性化について活動していきたいと抱負を語った。

連携の輪拡大に期待

京都の環境社会新聞社主　堤九十生氏

堤社主

第6回日本の農業と食のシンポジウムに初めて参加した京都に本社を置く環境社会新聞社代表、環境カウンセラーの堤九十生氏が感想を本紙に寄せたのでそれを紹介します。

4月2日（日）環境農業新聞社の成瀬社長の御紹介で日本ホメオパシー医学協会主催のシンポジウムに参加させていただいたのは初めてで、スタッフの皆さんの行き届いたご案内と場内の設営を拝見して並々ならぬ熱意を感じました。

私は事前に成瀬社長の熱心な説明をお聞きしていましたので、期待して、関係すると思う3社と4名の方をお誘いして参加させていただきました。参加者4名の感想はお聞きしていませんが、ハイレベルな基調講演と数多くの事例のご紹介のプレゼンテーションを拝見して、ホン活動は日本の農業の方向性を、経済優先から自然重視政策に見直して、衰退し疲弊して行く日本社会への警鐘であり覚醒への道程を先行するに相応しい豊富な内容のイベントであったと納得し得心しました。

発展に期待したい

今後の同協会と、設立間もない日本豊受自然農株式会社の発展に期待したいと思いました。

同時に私の脳裏に過ったのは、日本政府の農業政策と農協、農地、後継の若い世代が、同協会が目指す方向、自然回帰に向かうことに生き甲斐を感じ魅力を感じさせることが出来るか、その手腕にかかっているとも感じました。

エールを送る

また、提案させていただくとすれば、欠かせないのは、他の異業種の活動団体に歓迎される形で受け入れられ、連携、融合する形で、繋ぐことができるか否かにかかっていると思ったことです。

唯我独尊の思考を持つ異業種業界、団体に手を差し伸べ温かい融合、「結」が連なり喜びの連鎖の中に今後の同協会のご苦労とご努力が光れと、エールをお送りするものです。

特に由井会長の卓越したリーダーシップが他の業界や実力者に届き連携の輪が拡大することを切に期待しご祈念申し上げます。

2017年4月11日

稲本　正氏

来賓講演：稲本　正氏（正プラス株式会社　代表、オークヴィレッジ会長、ＮＰＯ法人ドングリの会・会長、作家、工芸家）「森と生きる　－Evolve with Forest－」

1974年、飛騨高山の農家の納屋を出発点に「オークヴィレッジ」を創設し、〝森と生きる〟をテーマに環境との共生を目指したモノ造りを実践してきた稲本正氏は、二十余年にわたる活動と今後の展望について語った。

もともと原子物理学専攻だった稲本氏、学者畑から「緑の生活」へ転身したのは、天才物理学者シュレディンガーの「地球を浄化するのは植物圏でしかない」という言葉がきっかけだったと言う。

日本の森に生育する木を素材としたモノ造りは家具、玩具から建築まで幅広い展開をみせていますが、真の循環型企業にしたいという願いから、①木が生きた年月と同じくらい永く使い続けられるモノ造り②暮らしのさまざまな場面で自然素材を活かし隅から隅まで使う提案③使ったら植えるの発想で広葉樹の植林・育林に尽力を基本理念としている。

二十数年かけて緑ゆたかに生い茂る森に成長した写真を指して「日本の国土は100本の木を植えたら90本が立派に育つ。中国なら1割ほどしか育たないでしょう」と言う稲本氏。日本は国土の67％が森林で、世界第3位の森林国であるばかりでなく、上位森林国が針葉樹林だけなのに比べ、日本は亜寒帯から亜熱帯までを網羅し多種多様な生態系を抱く樹木の宝庫でもあるとして、日本の国土がもつ潜在的な豊かさを強調した。

稲本氏はまた、世界の森を周って研究を重ねる中で、千年も生き続ける樹木の力の源が「アロマ＝香り」にあると知り、日本の樹木のアロマ製品の研究・開発に力を注ぐ。

クロモジ、ヒノキ、アスナロ、ミズメザクラといった樹木のアロマが、認知症、睡眠障害、イライラ、筋の硬化などに効果をあげるという実験結果が出ていると言い、稲本氏は「抗酸化能は確実にある。樹木から精製した芳香蒸留水の持つ生命エネルギーが人間の健康にも活かされ、セルフメディケーションや医療現場への応用が期待される」と語った。参加者にアロマのテスターが配られ、実際に香りを体感しながらの聴講となった。

アロマオイル、アロマウォーターの製造にあたっても、稲本氏が何よりも大切にしているのは「森を大切にしながら採る」こと。枝葉しか使わず、水蒸気蒸留法によりエッセンスを採取することで、翌年にもふたたび採れるのだそうです。

「いまだに世の中は、林業への理解が乏しい現実がある。しかし世界の歴史を振り返ると、実際に歴史を変えた人間というのはたいした数ではない。新しい潮流を作り出す少数の人がいて、それを伝えるアーリーアダプターという人々が出現し、さらにある人数にまで達した瞬間に一気にワーッと広まる。それが新技術の伝搬過程。今、その直前にいるので、どこかに突破口が開ければ…と思っています」と語った。

船津　準二氏

来賓講演：船津　準二氏（山本幸三内閣府特命担当大臣　特別顧問）「日本の潮流は原点回帰へ動きだしてきた」

船津氏は日本再生のキーは、自然を中心としたやり方に戻る「原点回帰」が大切であることを様々な観点から語った。また、「原点回帰」の骨子は由井大会長の基調講演でも既に触れられていた点も付け加えられた。

「自分の役割は大臣の地方創生に関する考えをいかに具現化し、現場の実態を的確にとらえて中央と現場の乖離がないように提言することであり、自分は現場主義で現地に足を運び、実情把握に努めている」と語った。

船津氏のこれまでの経験と模索を通して気づいた点は、①原点回帰に基づかないと地方創生は実行があげられない。②補助金制度への依存と縦割りの習慣を自治体が自ら断ち切り、地方自治の本旨に基づき、立ち戻らないと前に進まない。③地元の協同組合、商工会などの経済活動団体が、地域振興を目的とした原点を共有して共同活動を起こすこと、及びＯＢの人たちも含めた総力戦を展開すること。④地方創生へ必死に取り組んでいるニュータイプの職人集団が創出したイノベーション技術の活用すること。

また、原点回帰に関して、地域運営組織、市町村合併、世界農業遺産、有機農法などの視点から語った。

パネルディスカッションは、船津準二氏、稲本正氏、佐野孝志氏、片野敏和氏、信州大特任教授で生薬原料薬草の国内栽培復興に取り組む小谷宗司氏、由井寅子大会長が登壇して行われ、自然回帰に沿った産業復興、日本再生に向けた実効的な解決策が提案がなされ、聞き応えある議論となった。

最後に由井寅子大会長より、「多くの参加者とゲストの方々に支えられ、本日素晴らしいシンポジウムが開催できたという感謝の気持ちと、私たちが心も体も魂も自然回帰していくことの大切さ、そして本大会が皆様に自然に生きることへの情熱となることを心より願っております」と語り、会場からの大きな拍手で、第六回　日本の農業と食シンポジウムは大盛会の中、幕を閉じた。